

ニュースレター

発行者
キリスト教礼拝音楽学会
〒145-0071 東京都大田区田園調布 2-48-12-501
TEL/FAX 03-3721-0891
発行日 / 2008年11月3日

★キリスト教礼拝音楽学会 第8回大会が無事終了しました！



★会場

日本キリスト教団 東梅田教会

★プログラム

10:00-11:00 礼 拝・・・水野隆一
11:00-12:00 基調講演・・・金澤正剛
13:00-15:00 講 演・・・手代木俊一、新垣壬敏
15:00-15:30 ディスカッション
15:30-16:30 総 会

キリスト教礼拝音楽学会 第8回大会報告

手代木俊一

キリスト教礼拝音楽学会第8回大会(テーマ<キリスト教と音楽>)は、2008年6月7日(土) 10時から16時20分まで大阪の日本基督教団東梅田教会で開催された。これは学会発足以来はじめての東京以外での大会だった。

総合司会は伊東辰彦氏が担当し、金澤正剛会長の会長挨拶ではじまった。次に水野隆一氏の礼拝(創作)、金澤正剛氏の基調講演、昼の休憩を挟んで手代木、新垣壬敏氏による講演Ⅰ、Ⅱ、基調講演と講演Ⅰ、Ⅱに関する発表者と参加者のディスカッションが行われ、総会で大会の幕を閉じた。

ここで大会の詳しい報告は『礼拝音楽研究』第8号に譲り、発表者、参加者としての印象・感想を中心に書き記したい。

東梅田教会の礼拝堂で行われた水野隆一氏による礼拝(礼拝構成・式文作成・司式、奏楽・山口直子氏)は、礼拝音楽の理論的研究とその実践を目指す当学会として大変有意義なものだった。最初に礼拝に関する水野氏の考えが述べられ、式次第『命の木』と緑の葉をあしらった画用紙が配布された。最初はその緑の画用紙の意図が汲めなかったが、正面に大きな木が描かれ、その木に会衆1人1人が葉(緑の紙)を貼って行くためのものだった。そしてその葉には神に召され、今でも思いを寄せる人の名前

を書き、「彼らの思い出は、色あせることのない祝福です」「彼らの魂は、私たちの魂に結びついています」「彼らは永遠に生きています」と祈りの言葉を捧げ、結びの祈りとなった。日ごろ礼拝に出席しても、聖書朗読、牧師の説教、讃美歌歌唱と何か決まったことをただ整然と行っているだけだが、既に生涯を終えた、愛する人の名前を紙に書き、祈るということで礼拝に自分も参加していると実感がわいた。そして詩篇歌(CD)を聴き、詩篇歌を歌い基調講演に繋いでいくことになった。

金澤正剛氏の基調講演は今回の大会のテーマ<キリスト教と音楽>で、その中でも特に「詩篇について」言及し、詩篇の伝統を時代的・地域的に展開された。概観の後、カトリック(バロック時代まで)、プロテスタント(ルター派のコラール、カルヴァンと詩篇歌[代表的詩篇歌集、代表的作曲家、英国国教会とアンセム]、古典派以後の詩篇)を僅かな時間の中で、CDで音楽を流しながら解説した。短時間で詩篇の伝統を時代的・地域的に展開できるのは、この分野の第一人者しかできない業と感じた。ちなみに<キリスト教と音楽>ということでは、金澤正剛氏は今大会のテーマの同じ『キリスト教と音楽』を音楽之友社から昨年出版しており、今大会のテーマ設定の起因の一つとなっていた。

筆者の発表「日本の讃美歌・聖歌史をとおして」は基調講演を受け、讃美歌は詩篇の翻訳から始まったこと、日本語との適合にどのようなことがなされたかを歴史的に展開し、<キリスト教と音楽>を論じた。ここで資料としたのは、幕末の勝海舟訳讃美歌と明治初期のゴープル訳讃美歌の変遷で、時代が蘭学から英学に移っていったこと、

その時代のアメリカの影響を受け、明治初期は詩篇歌ではなく、福音唱歌、日曜学校讃美歌の影響を受けたことを発表した。この分野の先達であり、知名度の高い2人(金澤正剛氏・新垣壬敏氏)の間での発表は光栄であったが緊張もした。

新垣壬敏氏は「作曲家の立場から」として、筆者が言語の問題にしたことに関して新垣氏は、母がフィリピンの方で父が日本人(沖縄出身)、フィリピンで生まれ、幼少をフィリピンで過ごし、共通語が英語だったので3カ国語の中で育ち、言語に敏感に成らざるをえなかった背景があったことを最初述べ、講演が始まった。時代様式と個人様式という観点から典礼音楽の自国化の問題点(多様性等)、教会旋法に言及し、「ソレム式唱法による区分のリズム」のテ・ラローシュ版と水嶋版の相違を解説し、言語(日本語)と音楽の問題から新垣氏自身の見解である「グレゴリオ聖歌日本語様式による新区分のリズム」を展開しながら「キリスト教と音楽」を論じた。その際自作を例に示して展開し、最後に新垣氏の作曲である《主の食卓を囲み》《あの一瞬のひらめきは》を参加者全員で歌った。《あの一瞬のひらめきは》は広島・長崎の原爆をテーマにした曲で作曲者としての時代への発言であるということであった。作曲という実践をとおして理論を展開し、そしてその結実である2曲を歌ったことはキリスト教礼拝音楽学会の目指す方向を示しているようだった。

ディスカッションでは、3人のパネラーと参加者の活発な意見の交換がなされた。講演の補足、ルターによる教会旋法以外の音楽、キリスト教音楽の土着化(方言で歌うということ、5音階等)、近代化と音楽、礼拝に相応しい音楽と現状、中国での礼拝音楽、勝海舟訳讃美歌の旋律等話し合われたが、詳しい内容については『礼拝音楽研究』第8号に譲りたい。

総会では金澤会長が司会、伊東氏が書記、事務局手代木が進行を務め2007年度事業報告及び2007年度収支決算報告、2008年度事業計画及び2008年度予算案が承認された。決算報告で収入合計と支出合計(繰越金が別立計算)の金額が一致すると理解しやすいとの意見が出された。検討の結果、来年度から報告書の書式を改めることになった。また、役員から大会成立のための委任状は必要なのではないかという提案がなされたが、重要案件には委任状は必要という意見も出され、継続審議となった。昨年度会場設定等でいつまでも大会開催日が決まらなかったが、その反省から来年の大会は5月30日(土)に開催することをこの時点で決定し、16時20分すべての日程が無事終了した。

今回大阪での開催ということでこの地域の会員が少な

く、参加者の大幅な減少が想像された。そこで各種団体に後援をご依頼したところ、WCC in 関西委員会、日本リードオルガン協会、関西キリスト教音楽講習会、パックスアーレン株式会社の賛同を得、協力していただいた。例年を上回る71名の参加者を数えたのも後援団体のおかげである。参加者は後援団体(38名、非会員7)が正会員(26名)を上回った。そして事務的な作業、関連資料は販売等も担当していただいた。また、日本基督教団東梅田教会には会場の提供だけでなく、大会運営のサポートもしていただいた。大会が無事終了できたのも、WCC in 関西委員会、日本リードオルガン協会、関西キリスト教音楽講習会、パックスアーレン株式会社、東梅田教会の方々の力によるところが大きい。最後にこの場を借りて事務局大会担当としての感謝の意を表し、報告を終えたい。

(当学会副会長)

「キリスト教礼拝音楽」という言葉

金澤正剛

最近ひとりの熱心な読者から手紙を頂戴し、私が2年ほど前に出版した『キリスト教と音楽』に誤りがあるのではないかと指摘されました。詩篇の番号のつけ方がヘブライ語の聖書とラテン語訳の聖書では違っているという話から、両者の対照表を示したのですが、それが逆になっているのではないかと、ということなのです。まさかそんなことは無いと思ってさっそく調べてみたところ、まさに指摘された通りで、表が逆になっているのです。さらに調べてみると、一番初めの原稿では正しかったのに、出版社とやり取りしているうちに、どこかでひっくり返ってしまったらしいのですが、それがどうしてそうなったのか、また最終の段階で何故見過ごされてしまったのか、今となっては全く解りません。正確であることがいかに難しいかを思い知ったことでしたが、それにしても何故見過ごしたかを推察するに、対照表として出してしまった後はそれが間違いないものと思い込んでしまったからか、あるいはそれを目で直しながら見てしまったからではないかと思います。文章として読んでいけば、そんな間違いは起こらなかったのではないかと反省したことでした。

それにしてもこの著書、意外と好評で、この4月には第4刷が出版されたところで、かなり多くの方々に読まれ、

書評も幾つか書いていただいています。それなのに何故今まで、著者である自分も含めて誰も気が付かなかったということにもいささか驚かされます。(もっとも、気が付いたが言い出さなかったという方は居られるかも知れません。居られましたら、改めてお詫び申し上げます。) さっそく出版社に連絡したところ、「そうですか、では第5刷で直すことにしましょう」という返事が返ってきたので、再度びっくりしました。果たしてその後、来年1月に第5刷を発行する予定だとのお知らせを頂戴し、2年間で5回目というのは結構悪くないな、とも思ったことでした。

そこでさらに考えることとなりました。わが学会は「キリスト教礼拝音楽」を名乗っているが、それは「キリスト教音楽」と同じなのだろうか、違うのか、ということです。結論から言えば「違う」ということなので、キリスト教礼拝音楽以外にも、仏教礼拝音楽や、ヒンズー教礼拝音楽などもあるわけです。しかし一方では、キリスト教でも「礼拝音楽」の他にも同じような意味で使われているが、微妙に異なるという言葉が幾つかあることにも気づきました。例えば「礼拝音楽」と大部分重複するが、完全には同義語とは言えない言葉に、「典礼音楽」、「教会音楽」、「宗教音楽」などがあるわけです。ではこれらは一体どのように違うのか、ひとつここで考えてみたいと思います。

これらのうちで最もはっきりしているのは「典礼音楽」であるように思います。「典礼」とは礼拝の式次第のことを指します。ということは、「典礼音楽」とは「正式に式次第の一部として作曲された作品」である、と言って良いでしょう。これに対して「教会音楽」となると「教会で演奏されるために作曲された作品」ならばすべて良いとなり、必ずしも典礼音楽ばかりではないということになるでしょう。さらに「宗教音楽」となるとずっと範囲が広がって、「宗教的な内容の音楽すべて」を含むことになります。つまり宗教的な内容の音楽であれば、教会と無関係であっても良いわけです。

具体的な例を挙げて考えて見ましょう。カトリック教会で歌われるミサ曲や詩篇などが典礼音楽であり、教会音楽であり、宗教音楽であることには異論はないでしょう。しかしプロテスタントの賛美歌はどうでしょうか。教会音楽であることは確かであるが、礼拝のどの部分で歌うかは教会によっても変わり、礼拝の式次第にはっきりとは位置付けられているわけではないので、正式に典礼音楽と呼ぶには少々ためらいを感じます。また同じプロテスタントでも、聖公会あるいはそのルーツである英国国教会の場合、いわゆる「サーヴィス」に含まれるマニフィカトやテ・デウムなどは典礼音楽ですが、アンセムやオルガン用のヴォランタリーは教会音楽ではあるが、典礼音楽とは言えない

のではないかと、ということになります。

それでは「礼拝音楽」はどうでしょうか。これは「教会音楽」とほぼ同義語であるようでもあります、厳密に考えると少しばかりずれる部分があるように思われます。つまり、「教会の外で歌われる礼拝のための音楽」もあり得るということです。スペインの最西北端に位置するサンチャゴ・デ・コンポステラ大聖堂や、聖母の家が天使たちによって移築されたと信じられている奇跡の地ロレートなどの聖地に向かう巡礼たちが、旅を続けながら歌う巡礼歌などはその良い例ではないでしょうか。またそれに似た例に、13～14世紀にかけて特にフランシスコ会の信者の間で流行したラウダという宗教的な内容の流行歌があります。当時永続する戦争、伝染病の流行、社会全体の腐敗による絶望感などから民衆の間に贖罪の意識が高まり、祈りの歌を歌い、裸の身体を木の枝で打ちながら行進するということが盛んに行われたことが知られています。彼らは「ラウデージ」の名で呼ばれるようになりましたが、それは「ラウダ」という祈りの歌を歌いながらさまよう人々」と言う意味だったのです。そのラウダは明らかに教会の外で歌われていたわけなので、「教会音楽」ではありません。しかしそのような「祈りの歌」を、「礼拝音楽」と見なすことは出来るのではないのでしょうか。

例えば、しばしば宗教曲と見なされるシューベルトの《アヴェ・マリア》が似たような例です。あれはウォルター・スコットの名作『湖上の女』の中でヒロインのエレンが、聖母に祈りを捧げる場面を歌詞としたものであるわけで、分類するとすると「世俗音楽」となるが、「祈りの歌」であることもまた確かです。またそうなる、マルティン・ルターによる聖書のドイツ語訳を歌詞としているブラームスの《ドイツ・レクイエム》のことが思い起こされます。それが「教会音楽」でないことは明らかですが、「礼拝音楽」と見なすことは可能でしょうか。一方礼拝の始まりを会衆に知らせるために鳴らす鐘の音や、オルガンによる前奏などは、確かに「教会音楽」であることには異論はないものの、厳密に言えば「礼拝音楽」とは言えないような気がします。こうして考える時、「礼拝音楽」であるか否かの境界線はかなり微妙であるように考えられます。

そこで最後に「キリスト教音楽」について考えてみましょう。そもそも「キリスト教音楽」とは何なのでしょう。か。「キリスト教のために作られた音楽」なのか、「キリスト教的精神で作られた音楽」なのか、「キリスト教の影響で出来た音楽」なのか。もしこのうちの三番目の意味で用いるとするならば、あらゆる形の世俗音楽をも含めて、ヨーロッパ音楽のほぼ99パーセントが「キリスト教音楽」に含まれるような気がします。例えば前述のシューベルトの

《アヴェ・マリア》にキリスト教的な祈りの気持ちが含まれているのは当然としても、同じ作曲家の他の歌曲においてもキリスト教ならではの考え方が底辺に流れているような気がします。一方ひと頃大いに人気を集めた映画『ボディー・ガード』で絶唱したホイットニー・ヒューストンが歌った曲に、《イエス様は私を愛してくれる》という歌がありました。またわが国を代表する人気のデュオ、チャゲとあすかが《世界にメリー・クリスマス》という曲を歌っていたことがありました。この場合本人たちはクリスチャンでもなければ、宗教的な気持ちも皆無であったとしても、キリスト教が無かったらクリスマスは存在していなかった筈なので、キリスト教と無関係というわけにはいかないでしょう。中世の教会でポリフォニーが育てられたおかげで、ルネサンス時代にはミサ曲やモテットが盛んに作曲されましたが、一方では同じ書法で作曲されたシャンソンや、マドリガルも生まれたわけです。またバロック時代に教会ソナタや教会コンチェルトなどが盛んとなっていなかったら、モーツァルトやベートーヴェンの交響曲や協奏曲も存在しなかったことでしょうか。そのように考えていくと、キリスト教が無くても存在し得た音楽は、現在われわれが知っているヨーロッパ音楽の中にはほとんど見当たらないと言って良いのではないのでしょうか。

もっともここまで言うのはいささか極論に過ぎない、と言われてしまうかも知れません。

しかし「キリスト教音楽」とは何であるかに関しては、かなり解釈の違いが見られそうですし、「キリスト教音楽」とそうでない音楽とをどこで区切るかの境界線についても、人によってかなり考え方が異なるような気がします。当学会が単に「キリスト教音楽学会」とは名乗らず、「キリスト教礼拝音楽学会」と名乗っていることの意味、そして理由について、深く考えさせられたことでした。

(当学会会長)

★第9回大会予定

日 時：2009年5月30日(土)
会 場：明治学院大学 白金キャンパス
ぜひ、ご予約に入れて下さり、ふるってご参加下さい。

★学会誌発行予告

『礼拝音楽研究 第8号』……2009年4月半ば刊行予定
内容

- 巻頭言……手代木氏
- 論文……故丹羽氏の遺稿文
- 書評……手代木氏

『明治期カトリック聖歌集』
Eヘンゼラー、安足庵由美著

●書評……赤井氏

『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典
明治篇』手代木俊一著

●第8回大会プログラム・報告……古澤氏

※別冊『2009 日本の讃美歌・聖歌研究書誌』手代木俊一著を同時発行予定

★役員会報告

①日 時：2008年6月7日(土) 大会終了後、会員を含めた反省会

出席者：新垣、伊東、金澤、手代木(会員数名)

議 題：●大会の反省

②日 時：2008年9月11日(月) 13:30-

場 所：立教セントポール会館

出席者：新垣、伊東、金澤、佐々木、塩谷、手代木

議 題：●大会の会計報告、反省等

●学会誌、ニュースレター

●来年の大会について

③日 時：2008年11月30日(日) 14:00- (予定)

場 所：池袋、芸術劇場5Fの喫茶店

議 題：●学会誌、ニュースレター、大会について

★新入会員

二谷 尚

柳澤 健太郎

★会費納入のお願い

会の運営に対して、いつも支援をいただき感謝申し上げます。2008年度会費の振込みを済まされていない方は、下記の口座にお振込みくださいますようお願いいたします。2007年度総会にて決定された会則改正により、2008年度より、会費が変更になっています。

キリスト教礼拝音楽学会 東北地区部会
郵便振替口座 02240-3-46335

入会金：3,000円(入会時のみ)

年会費：正 会 員 6,000円(2007年度までの分は5,000円)

準 会 員 3,000円

賛助会員 20,000円

●振込用紙には* ____年度/正・準・賛助会員/会費の金額を必ず明記の上、ご送金ください。

●住所変更等も、お知らせください。

●会費納入についてご不明なことがございましたら、下記にご連絡をお願い申し上げます。

会計担当 佐々木しのぶ

〒980-0023 仙台市青葉区北目町6-6-1101

TEL/FAX022-262-6565 Email:sshinobuorg@ybb.ne.jp